

仙台から見る縄文文化の広がり



旧石器時代のあと、弥生時代が始まるまで約1万年も続いた縄文時代。縄文土器と一口に言ってもその姿は刻々と変化します。その終わりを飾るのが亀ヶ岡式土器です。繊細な文様が特徴で、縄文文化の最高到達点と位置付けても過言ではありません。仙台市内では大野田遺跡や赤生津遺跡などから出土していますが、東北地方を中心に北海道や高知県でも出土例があり、広い範囲での交流が行われていたと考えられます。

また、縄文時代には、土器や石器などの実用的な道具だけではなく、非実用的と思われるものも多く作られていました。その代表例が粘土で作られた素焼きの人形である土偶です。さまざまな造形の土偶が作られていますが、大野田遺跡から出土したハート形の顔をした土偶は関東地方でも出土しており、交流があったものと推測されます。



さまざまな造形の土偶（大野田遺跡出土）

多様な人が関わった古代の役所

こおりやま

むつこくふりつりょう

むつのに

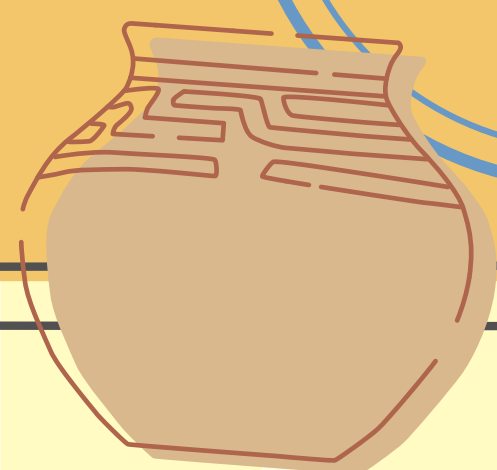
郡山遺跡は、多賀城以前の陸奥国府（律令国家が陸奥国を治めるために設置した役所）であることがわかっています。この役所には、全国的にもめずらしい石組池が造られており、律令国家の役人と東北地方の蝦夷が、池を使って儀式をしたと推測されています。

また、郡山遺跡から出土した遺物には、仙台周辺で一般的に見られる土師器の他に、関東地方の土師器に類似したものや、精緻な粘土で作られ、当時の都で使われた畿内産土師器も含まれています。このことから、地元の人だけでなく、関東地方から移り住んだ人や、都から派遣されてきた役人など、多様な人びとが郡山遺跡の役所の造営に関わっていたと推測されます。



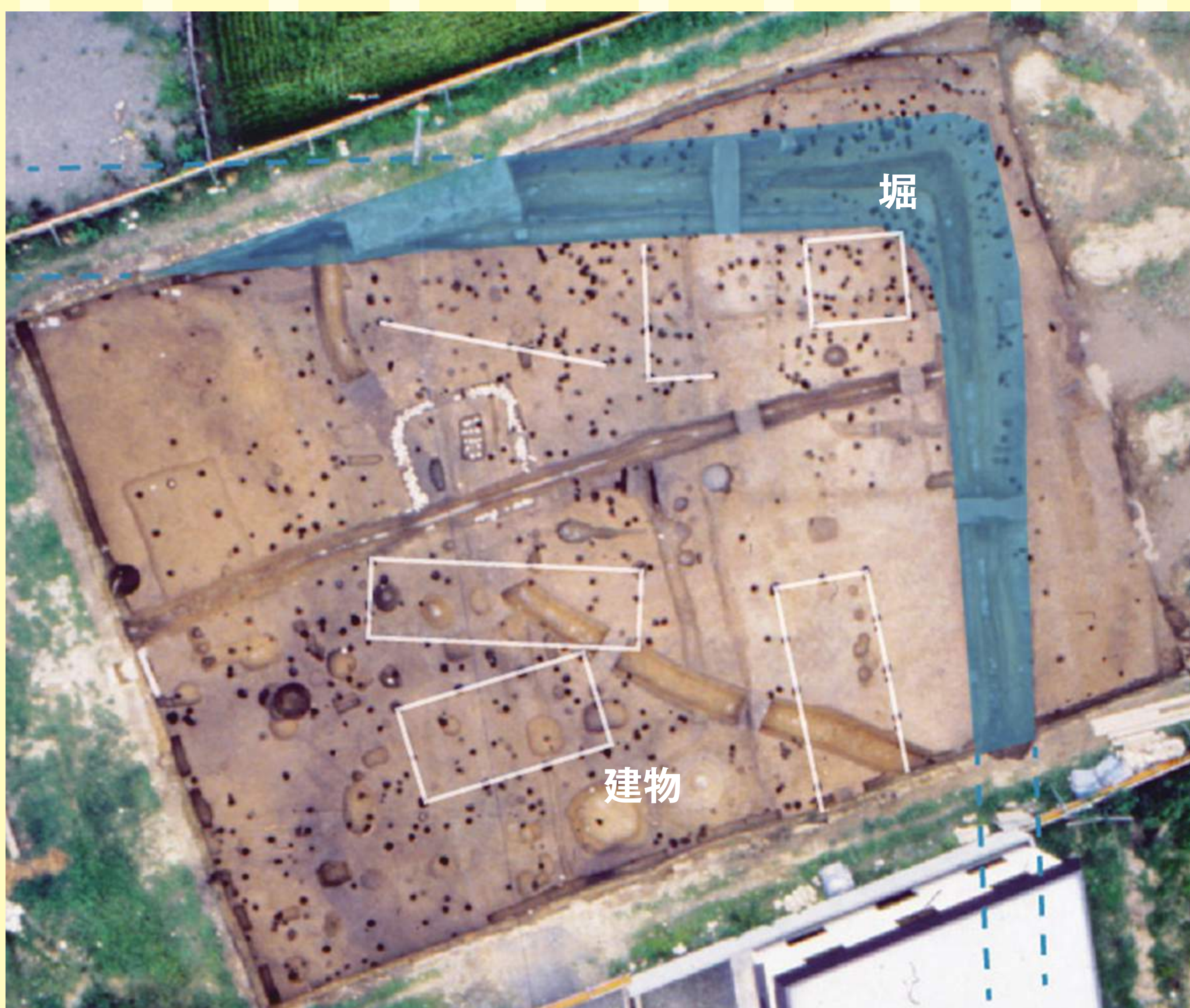
発掘調査で発見された石組池（郡山遺跡）

とう じ き 鎌倉武士の陶磁器



鎌倉時代、仙台市南側は名取郡と呼ばれ、鎌倉の御家人が地頭ご け にん じ とうとして郡の管理を任されていました。仙台市太白区にある王ノ壇おう の だん遺跡は、その名取郡北方の支配拠点であった可能性が考えられています。発掘調査では、大規模な武士の館跡やかたあととともに、そこで使用されていたたくさんの陶磁器が見つかりました。東海地方産の陶器とう きをはじめ、鎌倉市（神奈川県）内で見つかっているものと同形の火鉢や、当時高級品であった中国産の器うつわなども出土しました。

これらの陶磁器は、鎌倉武士により持ち込まれたものや、商人により運ばれたことが想定され、鎌倉時代の交通と海外貿易の発達といった様子をこれらの出土品から垣間かい ま見ることができます。



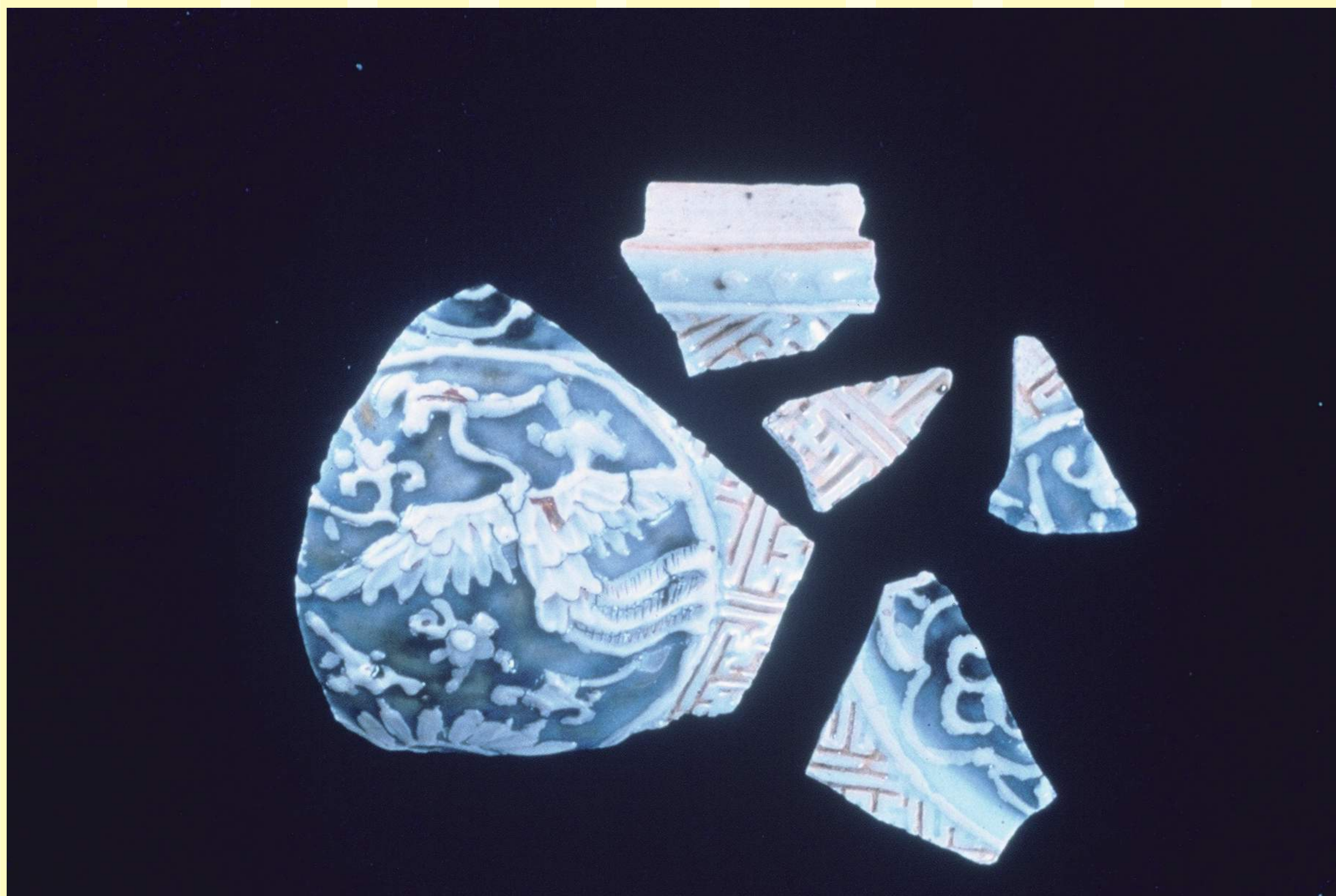
堀に囲まれる館跡（王ノ壇遺跡）

だて “伊達”な文化と舶来品

はく らい ひん



仙台城を築いた伊達政宗は、伝統的な文化を大切にしながら外国の文化も取り入れ、新しい“伊達”な文化を育みました。仙台城跡からは、かつて本丸にあった大広間や登城路に建てられた門の屋根を飾った瓦、生活を彩った陶磁器が数多く出土しています。陶磁器では、織部焼（岐阜県）や波佐見焼（長崎県）など、国内の他地域との交流を示すものだけでなく、中国産の青花や青磁、17世紀のヴェネチア産のガラス器など、外国との交流がうかがえる“舶来”のものも数多く見つかっています。その中でも、エナメルで彩色されたガラス器の破片は、国内ではまれな出土例です。これらのガラス器は当時の南蛮貿易、もしくは、仙台を訪れた宣教師などの外国使節がもたらしたものと推定されています。こうした舶来品の数々は、外国とのつながりを示す貴重な文化財です。



中国産の磁器（金彩鳳凰文合子）（仙台城跡出土）

炊く？蒸す？お米の調理方法

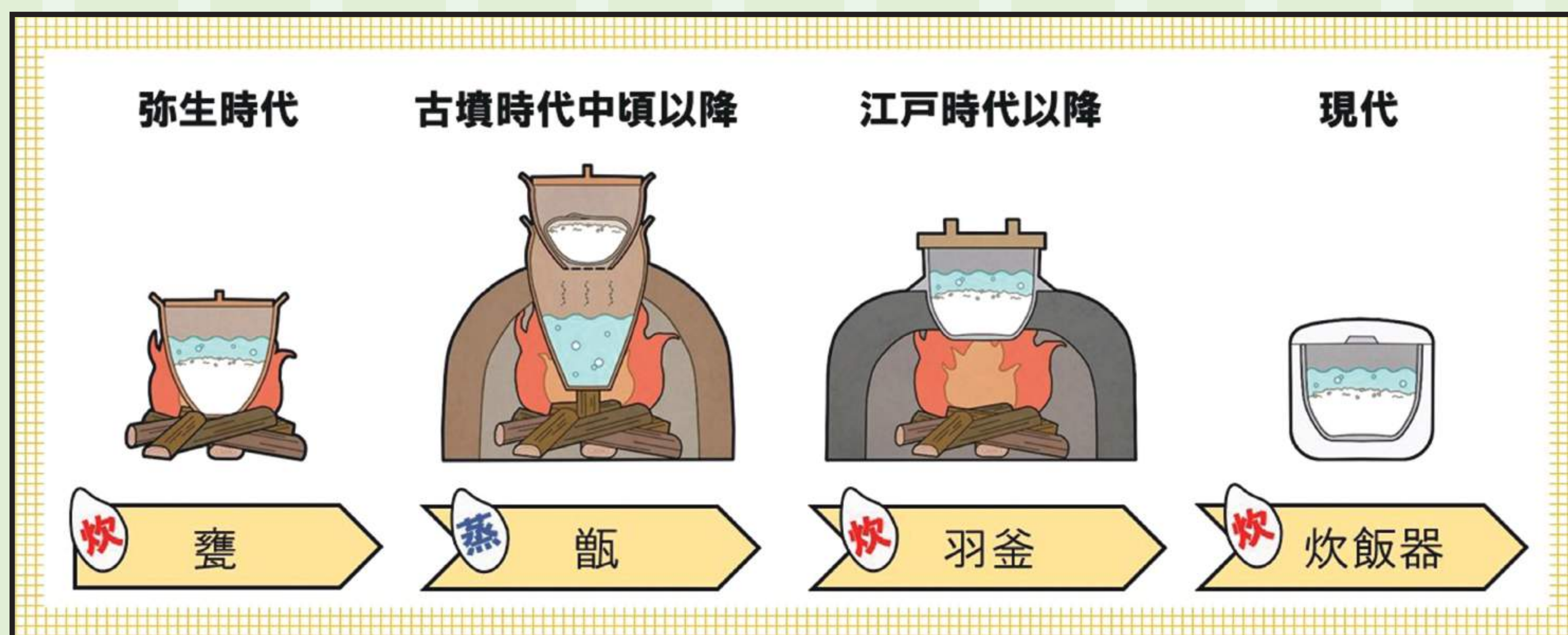


弥生土器を使った炊飯の様子

私たちの食生活に欠かせないお米。今は炊飯器が使われていますが、昔はどのようにして調理していたのでしょうか？

稲作が広まった弥生時代では、土器の甕かめを使い、お米を“炊く”あるいは“煮て”食べていました。その後、古墳時代中頃以降にカマドと甑こしきが登場すると、“蒸す”という調理法が取り入れられるようになったとされます。当初の甑は土製でしたが、のちに木製の甑が登場し、現在の蒸籠せいろうにつながりました。江戸時代以降には鉄製の羽釜はがまでお米を“炊く”という調理法が一般化し、昭和にはガスや電気でお米を“炊く”炊飯器が広く使われるようになりました。

このように、私たちの食生活に欠かせないお米の調理方法は、時代によって変化しながら、今につながっています。



お米の調理方法の移り変わり

農具のいまむかし



や よい

いな さく

弥生時代には稲作を中心とした農耕社会が成立します。仙台市でも富沢遺跡、高田B遺跡、沓形遺跡、中在家南遺跡などで弥生時代の水田跡が発見され、農具も出土しています。

くつ かた

なか ざい け みなみ

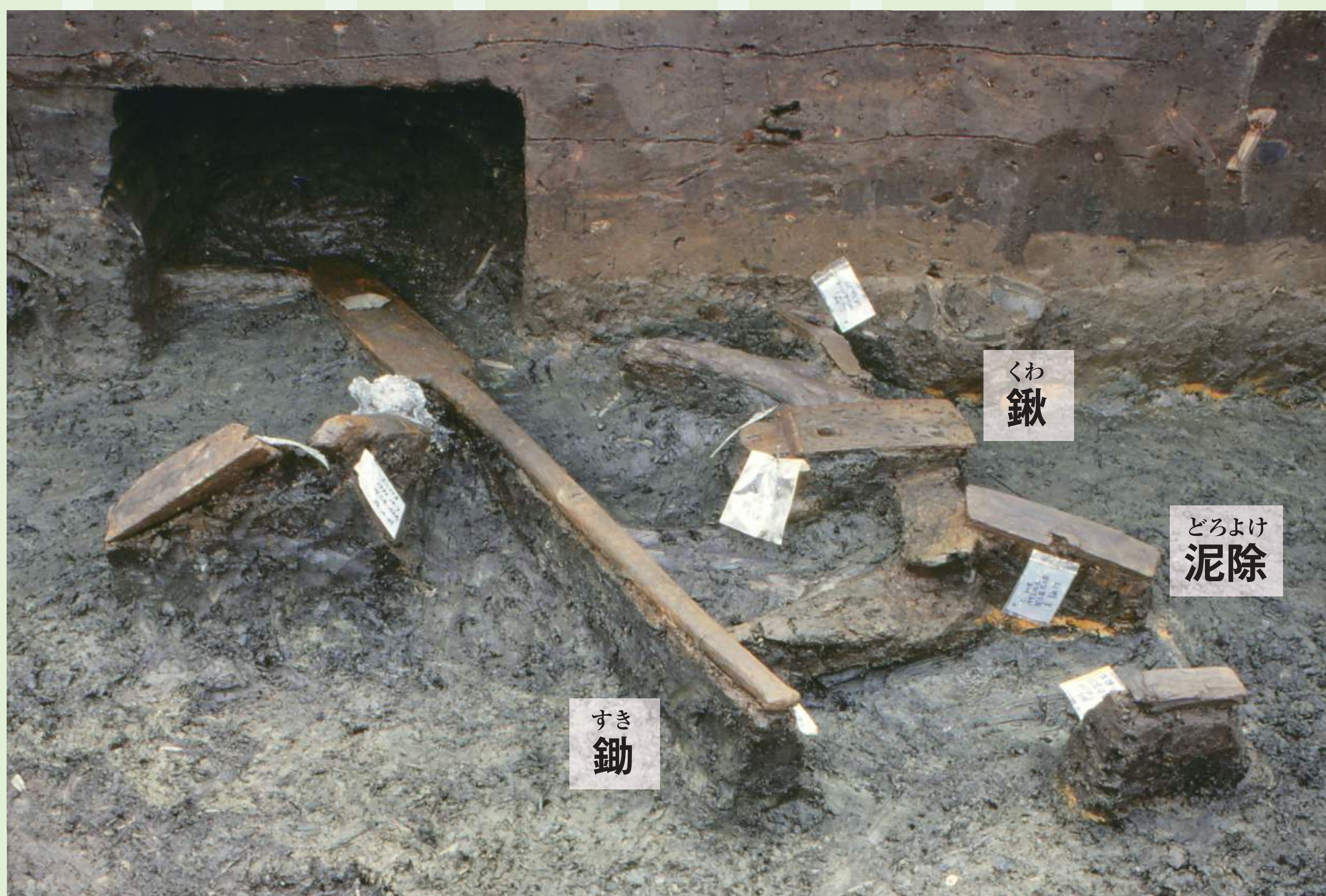
すき

くわ

いし ぼう ちょう

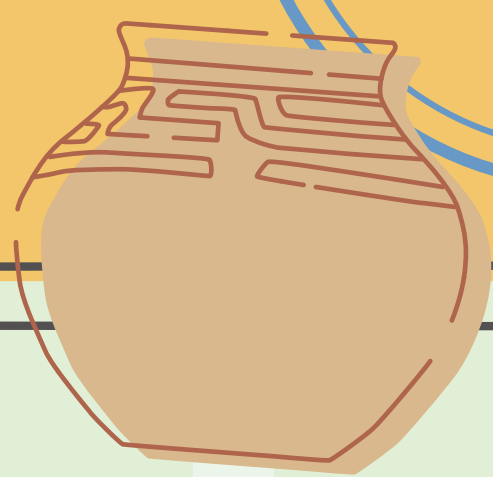
弥生時代では、鋤や鍬などの木製農具や石包丁などの石器が使われていました。鋤は土を掘り起こすための道具で、現代のスコップのような形をしています。鍬も現代と形状は変わらず、土を耕すために使われました。石包丁は稲の穂先を刈り取るための道具です。古墳時代以降は、石器に代わり鉄器が使われるようになります。稲を刈り取る道具としては鎌が使われ、鋤や鍬の刃先にも鉄が使われるようになります。

農具は技術の進歩とともに改良が加えられ、より便利になっていきますが、鋤や鍬のように現代まで基本的な形状が変わらないものもあります。



弥生時代の木製農具の出土状況（中在家南遺跡）

食器から照明具へ



周囲を照らす照明具として、奈良時代から江戸時代にかけて灯明皿とう みょう ざらが使用されました。灯明皿として使われる素焼きの小皿（かわらけ）は、もともとは食器として使われ、平安時代末以降、公家や武士などの館で行われる宴会えん かいや儀式・儀礼の場で大量に使用されていました。一度使用されると短期間で大量に捨てられ、今の宴会における紙皿や紙コップのように使われていたと考えられています。

照明具としては、小皿の内部に植物性油もしくは動物性油を入れ、灯芯とう しんを立て掛けて火を灯ともして使います。出土した小皿には、内外面に油や煤すすの付着物が確認できます。

江戸時代になると、陶器の灯芯置き（ひょうそく）の付いた灯明皿も登場します。なかには取手が付いたものも誕生し、今のランタンや懐中電灯に近い道具へとつながっていきます。



発見された武家屋敷跡と灯明皿の出土状況（川内B遺跡）

むかしもいまも使用される文房具

鉛筆や消しゴム、ノートなどは、学校や仕事で誰もが使う文房具です。寛永13(1636)年に亡くなり、瑞鳳殿(經ヶ峯伊達家墓所)に埋葬された伊達政宗の墓には、さまざまな筆や雄勝石製の硯に加え、それらを収めた筆箱など数多くの文房具が収められていました。その中には出土品では日本最古の鉛筆も含まれています。この鉛筆は軸木に芯を差し込んで使っていたと推測されています。

また、今では簡単に買える紙ですが、昔は紙が大変貴重でした。そのため古代においては、「木簡」と呼ばれる木札も紙の代わりに使用されました。そして木簡の字を消す際には「刀子」と呼ばれる小刀が使われました。古代の硯は陶器で作られており、主に官衙(役所)から出土します。「円面硯」や「風字硯」などの種類があり、現在同様「陸」と呼ばれる高い部分で墨を磨って使いました。



左:石室遺物出土状況、右上:黒漆葛蔴絵箱・文鎮、右下:鉛筆(いずれも瑞鳳殿)